

親鸞の学的方法論

——重釈要義について——

黒田 浩明

一 はじめに

親鸞の主著である『教行信証』中には、なぜそのような展開となっているのかということが了解しにくい箇所も存在する。その一つが、「行巻」、および「信巻」に示される、一般に重釈要義と呼ばれる一段である。もちろん文脈的意義からいえば、多くの先達によって用いられるその呼称からも理解できるとおり、その巻の要義、すなわち論旨の中核を為す概念を抽出して、重ねて釈す、という意味によってこの一段が配置されていることは間違いないことである。しかし、何を根拠としてこのような表現となっているのか、つまり、親鸞がどのように思考してこの一段の中身を著述するに至ったのか、ということは明らかにされてこなかったのである。

まず「行巻」の重釈要義について考えてみても、そもそも他力の語は『浄土論註』、一乗海の語は『観経疏』玄義分の「帰三宝偈」に「頓教一乗海」とあるところから由来しているが、

そこまでに主題として採り上げられてきたわけでもないそれらの語を、何故「行巻」の要義として見定めたか、ということに関しては明確になっていない。

そこで本論では、「行巻」の重釈要義の文脈構造から鑑みて、その撰述意図について考察することを通して、親鸞の学的方法論がいかなるものであったのかということを考えたい。

二 「行巻」における重釈要義の構造について

まずここでは、「行巻」における重釈要義の構造について検討したい。山辺習学・赤沼智善の『教行信証講義』では、「行巻」一部の所明は正しく終わったのであるが、これからは、翻つて、「行巻」の要義を重ねて解釈したまうのである。要義というは他力ということと、一乗海ということである。この二要義をこれから重ねて解釈したまうのである。⁽¹⁾

として、この一段を「他力」と「一乗海」に分けて文科し、続く一乗の機教対論とあわせて三項の構造から成ると把握し

ている。

ただし、文面に注目すると、「一乗海」の語は、「一乗」と「海」に分けて論じられており、それぞれに引証として経論が引かれている。したがって重釈要義は実質的には四項の構造になっていると理解すべきである。しかも他力釈、一乗釈、海釈と、続く一乗の機教対論は趣を異にしている（前者は引文によって論証される形式であるのに対し、後者は御自釈として親鸞自身が整理している）ことから考えれば、前の三項の内容こそが重釈要義の主題であり、機教対論は三つの要義によって集約される真実行のありかたの性質を機教両面から明らかにした一段であるとするべきであろう。

三 他力・一乗・海

何故他力・一乗・海の三つを「行巻」の要義として親鸞が挙げているのか、ということをごここで問題としたい。

「行巻」の主題が、本願の行である称名念仏を明かすことにあることはもとよりである。しかし造悪無礙に代表される異義異説はもとより、元祖法然の有力な門弟の間にも一念多念、有念無念の見解の相違が起こってくるという事実があったのである。それは恐らく、親鸞自身の内的な課題としても必然的に生じていた問題であろう。

そうした様々な見解を生じさせる根底にあるのは、本願の

念仏をも自己の行として修していこうとする、自力をたのむ姿勢であろう。したがって「行巻」の主題は、われわれが本来的に憑むべきは他力であり、本願他力こそが称名念仏の本義である、ということをお明かすことにある。

したがって、「他力」というのは本願力なり⁽²⁾という他力釈の第一の定義は、末世の凡夫が何によって仏道を歩み得るのか、ということをお明確に示したものであるといえる。換言すれば、われわれが真に憑むべき対象は何か、ということをお明確に顕彰したものであるといえるのである。

続いて、一乗ということについて考えてみよう。末世の凡夫が救われたいのは、その劣機性によるだけでなく、そこに生きるものが自障障他しあうという時代環境そのものの影響を免れないからである。したがって個人の救済は個人レベルで成立し得ず、自己と自己を取り巻く世界がひとしく救われていかなければならないのである。末世であればこそ、自利他円満という大乘の志願を満たす法が要請される。

しかもその大乘性は、己の機根や時代環境を鑑みて、それぞれがそれに相応した修行をたゆまず重ねていけば、あらゆるものが原理的には救われる、という性質のものでは全く不十分である。あらゆる一切の衆生が老若男女利鈍貴賤の差別無く、同じ法によって等しく救われていくあり方ではなければならない。そこで「行巻」では、称名念仏は誓願一仏乗であ

ることが明かされる。末世の凡夫であるという衆生の現実が、一乗の教えを要請するのである。したがって、一乗が課題となるということは、われわれにとって何故に称名念仏か、ということとを課題とするということである。

最後に、海という語についてである。弥陀の誓願が一切衆生の救済を根拠づけるとして、それでは阿弥陀仏とその国土は、どのようなはたらきをもって罪悪生死の凡夫を救い得るのか、という問題もまたはつきりとしなければならぬ。そこで親鸞が用いる比喩的表現が海の一語である。

海というのは、その広さや深さ、果ての無さなどの表現としても用いられるが、ここでは特に、一切の水が最終的に帰るところという意味合いにおいて用いられている。そして高僧和讃曇鸞讚第二十一、二十二首に、「衆悪の万川帰しぬれば 功德のうしおに一味なり」、⁽³⁾「煩惱の衆流帰しぬれば 智慧にうしおに一味なり」とあるごとく、一切を摂め取って功德・もしくは智慧へと転じ変えなすという本願名号のはたらきを、自然の海がもつ水の浄化作用に重ねて、象徴的に表現したものと理解できる。要するに、海という表現は、他力一乗の称名念仏がどのようにして衆生を救うか、という視点に即して、大行の性格をあきらかにしたものであるといえる。つまり、他力とは、「何を」、一乗とは、「何故」、海とは、「どのようにして」、という視点に即して、それぞれ表現された

ものと押さえることが出来る。

四 三つの要義積の構造化について

三つの要義の構造化について私は、親鸞の学的方法論のあり方から考えることで了解し得るのではないかと思う。主体的な学びを行うにあたっては、学の本質ともいえる問いの立て方が為されたと考えるべきであろう。その意味において学的方法論がどのようなものであったのか、ということについて金子大栄は一つの示唆を与えている。

金子大栄は、

学ということは、すなわち問うことである。われわれが何か問う、すなわち、問題をもつ、その問うということが、すなわち学ぶことである。(中略)われわれがもっている最も根本的な問いは何であるかといえ、それは、恐らく三つより無いであろうと思う。「何を」という問いと、「何故」という問いと、それから「如何に」という問いである。(中略)どんな学問でも必ずこの三つの問いをもっているのである。⁽⁴⁾

と述べて、真宗学というものが成立する上で最も根本的な問いとして、「何を」「何故」「如何に」という問いがあることを指摘している。この指摘に従えば、上記の三つの問いに主体的に関わっていくことこそが、真宗学の学的方法論そのものであるということがいえるであろう。

金子大栄のこうした指摘は、曇鸞の『浄土論註』における

三依釈といわれる一段を下敷きとして考えると考えられる。

何の所にか依る、何の故にか依る、云何が依ると。何所依は、修多羅に依る。何故依は、如来は即ち真実功德の相なるを以ての故にと。云何依は、五念門を修して相応するが故に上成じて下を起すこと竟りぬ。⁵⁾

それは「願生偈」の発起序とされる「我依修多羅真実功德相説願偈総持与仏教相応⁶⁾」という一段を、優婆提舍の名を成じ、上を成じて下の偈を起す一段であると曇鸞が理解し、天親がこのようにして優婆提舍の名を成じ成上起下をなし得るのは如何にしてであるのか、ということ推求する箇所である。つまり曇鸞はこの一段によって、『無量寿経』を優婆提舍し（無量寿經典群の精神を論書として著し）、帰命願生の一心のもと「願生偈」を製作した天親の学的方法論がいかなるものであったのか、ということ「何所依」「何故依」「云何依」という三つの視点から明らかにしたということになる。

先に確認したように、「行巻」の重釈要義の構成は「そのものは、いったいどのようなものであるのか」ということを明らかにするための学的方法論に則っているものであり、それこそが三依釈的方法論であったと考えられるのである。

五 まとめ

ここで強調したいのは、曇鸞と親鸞、両者における浄土経

親鸞の学的方法論（黒田）

典を見る眼には、「何を」「何故」「如何に」という三つの問いを根本とするという点で相通するものがあり、このことは主体的信仰にたいして客観的な学問的手法がどのように関わり得るのかという問題について大きな示唆を与えるものである、ということである。

信巻にも一般に重釈要義と位置づけられる一段があり、それについても今回考察したような構造的見受けられることが出来るが、その検討は他の機会に譲ることとする。

- 1 山辺習学・赤沼智善『教行信証講義』（法蔵館 昭和二六年 四〇〇頁）。
- 2 『真宗聖教全書二宗祖部』三五頁。
- 3 『真宗聖教全書二宗祖部』五〇六頁。
- 4 金子大栄『真宗学序説』（文栄堂昭和四一年 一三〜一五頁）。
- 5 『真宗聖教全書一三経七祖部』二八四頁。
- 6 『真宗聖教全書一三経七祖部』二六九頁。

（凡例）

・漢文は書き下しに、旧漢字は常用漢字にあらためた。また振り仮名、左訓等は省略した。
・敬称は略す。

〈キーワード〉 親鸞、『教行信証』、行巻、重釈要義、三依釈

（同朋大学大学院修了・博士（文学））